

館報 教育記念館

No. 103

令和6年11月 発行



企画展

「戦火を逃れて富山へ来た子どもたち」

～学童集団疎開80周年～

主な内容

◎教育時評 富山県高等学校長協会	会長 田中 宏育	2
◎第34回 郷土の先賢顕彰者紹介	宮崎 重美	3
	平岡 初枝	4
	今村善次郎	5
◎企画展「戦火を逃れて富山へ来た子どもたち」～学童集団疎開80周年～		6
◎恒例展「第22回さんすうワールド展」		7
◎「きらめき未来塾」 思考道場 お笑い道場 右脳活用道場		
◎令和6年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業		
◎恒例展「第21回子どもの目、自然不思議発見写真展」		8
◎展示予定		



発行所／公益財団法人 富山県ひとつくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町 1-5-1
 TEL (076) 444-2000 FAX (076) 444-2001 E-mail: toyama@t-hito.or.jp https://www.t-hito.or.jp
 (教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076) 433-2770)
 発行人／富山県教育記念館 館長 富田 利通 印刷所／いおざき印刷株式会社



「本物」と「クローン」

富山県高等学校長協会

会長 田中 宏育

先日、黒部市芸術創造センター・セレネ美術館に「クローン文化財降臨展」を見に行った。正直、私自身あまり美術には興味がなく今まであまり美術館に足を運ぶことはなかったのだが、今回は、第二次世界大戦の空襲により灰となった日本に存在したゴッホの幻の「ひまわり」（通称「芦屋のひまわり」）の復元、ゴッホの「星月夜」、ドガの「青い踊り子たち」、マネの「笛を吹く少年」、法隆寺金堂釈迦三尊像（飛鳥時代・国宝）の現状再現、火災で失われた法隆寺金堂壁画（飛鳥時代）の焼損前復元等、美術の教科書で見たことのある代表的な美術品の「クローン文化財」20点あまりが展示されていると言うことを聞きつけて行くこととした。セレネ美術館は、黒部峡谷鉄道宇奈月温泉駅の目の前にあり、大きくはないが趣のあるとても良い美術館であった。

「クローン文化財」の存在を私は今回初めて知ったのだが、「クローン文化財」とは、劣化が進んだり、破損して失われたりした歴史的な文化財や芸術作品を、オリジナルの詳細な調査を行い、デジタル技術とアナログ技術の双方を駆使し、絵具や基底材などの成分、表面の凹凸、筆のタッチまでを忠実に再現するべく、最新のデジタル技術、専門的な知見、職人の伝統技術を組み合わせて精巧によりがえらせたもので、この技術を開発した東京藝術大学が国内外の作品の復元を進めているものらしい。従来の複製と大きく異なる点として、ひとの手技や感性を取り入れることで、文化的背景や精神性など、「芸術のDNA」にいたるまで再現することがあるということだ。

文化財は、貴重なもので、状態を損なうことなく後世に残すのにベスト方法は、一般に公開しないことだそう。クローン文化財には6つの意義があり、①文化財の保存と公開という矛盾を解決。②文化財の独占から共有へと大きく舵を切るきっかけ。③人材育成を通して、

自国の文化を自らの手で守り、広めること。④消失した文化財や欠損・変色した文化財を限りなく元の状態に復元。⑤クローン文化財を前に誰でも鑑賞し、触れる。⑥クローン文化財そのものが、国境を越えて移動して、人々の眼前に公開。

しかし、日本が誇る重要な文化財の「偽物」「コピーキャット」「模倣」をつくる、と言うとマイナスなイメージがつき、実際に「クローン文化財」に対しては批判的な声もあるが、テクノロジーの力で文化財を高次元に保存し、何かリスクがあったときにはデータから再現できるようにしておくことは、非常に意味があると考えられているようだ。

今回、数々の「クローン文化財」を間近で鑑賞してみて、本当に本物と変わらない（本物を私は見たことがないのだが）、もしかしたら本物以上の出来映えであり、私自身非常に感動した。一方で、「本物」と「クローン」とは何かを考えさせられもした。

もう一つ、会場で作品横のQRコードからユーチューブの動画にアクセスでき、学芸員のアバターが登場し作品の魅力や時代背景を説明してくれた。（当日はアバターだと気づいていなかった。）作成したのは地元の建設会社が、セレネ美術館から依頼を受け、動画生成AIツールに解説文と学芸員の映像を取り込み、声や表情を再現したそう。ここでも、最先端技術が取り入れられている。

昨今、生成AIなどの発達により、本物と偽物を見分ける力や、生成AI等の最新のテクノロジーをしっかりと使いこなす倫理観が大切だと言われている。その通りだと私も思う。一方、「クローン文化財」のように目的をしっかりと持った使い方には興味関心をそそられた半日となった。

しかし、今日見た美術品の一作品でも本物を一度は見てみたいと思いながら帰路についた。

第34回 郷土の先賢顕彰者紹介

3階 郷土先賢室



文字性と造形性との 葛藤の中を生きた前衛書家

みやざき しげみ
宮崎 重美 (1930~2013)

宮崎重美は、昭和5年(1930)8月16日、五箇山、東砺波郡平村(現南砺市平)に生まれた。昭和20年(1945)、山村農業の改善を構想して富山県立福野農学校に入学(現南砺福野高等学校)するも勤労動員の日々を過ごし終戦。父が勧めてくれた通信教育の書道に熱中するようになり、学校に書道クラブを結成、部員100名余のリーダーとなっていた。

当時、県内には戦火を避け疎開した文化人が多数居住し、戦後の解放的な雰囲気の中、砺波地方においても様々な出会いが文化の新たな動きを生み出していた。昭和22年(1947)秋、宮崎は学校の寄宿舎の玄関で表立雲と出会った。表は農機具商のかたわら砺波地方で書道の革新を志す先駆者であったが、その書への見識、揮毫の奔放さ、書の因習を打破しようとする気迫に圧倒され、それが書道の革新運動に目覚める契機となった。そして版画家の棟方志功や前衛書家の大澤雅休と出会い、棟方からは学園祭に出品した古典臨書『牛欄造像記』を称賛され、書とは何かを探求する扉を開き、また、大澤には師事し、書の芸術創造の心と熱意ある指導・激励を受けて、書に生きようとする信念を持つに至った。

昭和24年(1949)秋、請われて平村に戻り小学校の冬季分教場の臨時教員となり(翌年正式採用)、物資が乏しい中、「書」を書き続けた。同26年(1951)棟方が福光を去り、同28年(1953)には大澤が東京で病死。寂しさと孤独に耐えながら自らの書をひたすら求め続け、同28年第6回書道芸術院展において院賞を受賞した。

そして、昭和35年(1960)、『脈-60』で、第3回毎日前衛書展 前衛大賞を受賞した。ところが、これを機に、受賞作および約10年間に制作した大部分の作品を、自らの手で焼却した。創造が競争の論理に巻き込まれることへの自戒であった。

その後、積極的な書作活動のため富山市へ移住。昭和45年(1970)、富山県書道連盟委員長就任を契機に、中央や県内の書壇との関わりを絶ち、団体展から離れ、発表の場を個展中心へと移していった。これは、それまで関わっていた前衛書の運動が、自らが否定していたものをつくり始めたことに強い反発を感じ、そこから離脱し、独行の道を歩むことにしたのである。中でも創作理念・方法の面では、前衛書が造形性を追求するあまり、書の本質である文字性を放棄してゆく流れを批判し、文字性と造形性との葛藤の中から、自分だけの書を生み出そうとした。墨の濃淡を生かした気力あふれるもので、文字としてのぎりぎりのところで造形的創造を試みたのである。

昭和55年(1980)、県書道連盟30周年を機に『富山県書道人志』(全5巻)の刊行を提案。その編纂に携わり、県書道文化の流れや先駆者のあゆみを記録に残し、後世に伝えることに尽力した。流派ごとに考え方が根本から異なる「書」について、どの流派にも属さず、書人としての高い見識と実力を兼ね備えていた宮崎だからこそ成し得た事業だと言える。平成3年(1991)3月、富山市立四方小学校長を最後に退職。同年秋には、多年にわたり書道の研鑽に励み、優れた作品を数多く制作するとともに、広く県芸術文化の振興発展に貢献したとして、県教育委員会芸術文化功労者表彰を受けた。

その後も精力的に創作を続け、平成25年(2013)死去。都会的猥雑さとは無縁の「五箇山人」としてのハングリー精神そのままに、生涯、書くことの根拠を自らに問い続け、純粋な創造のみに向かおうとする姿勢を貫いた。まさに「野を生きた書人※」そのものであった。享年82歳。 ※南砺市立福光美術館企画展タイトルより

<専門員 平野 強>



自宅にて



『富山県書道人志』全5巻
富山文庫『五箇山』
開いてある本は『富山県書道人志4』右ページは「脈-60」



平等な社会の実現に尽くした女性運動家

ひらおか はつえ
平岡 初枝 (1891~1978)

平岡初枝は、明治24年（1891）に上新川郡広田村（現富山市新屋）の神社神職の家に生まれた。明治42年（1909）に県立富山高等女学校（現県立富山いずみ高等学校）を卒業し、上新川郡の針原小学校の教員となった。弁当すら満足に持ってこれない教え子たちとその背後にある農村の窮状に胸を痛み、まず農村に暮らす婦人たちの意識改革が必要であると考えようになった。大正5年（1916）ごろから、赴任した小学校下ごとに「婦女会」を組織し、農村の生活・栄養改善指導に積極的に取り組んだ。昭和2年（1927）には、婦女会指導者としての功績が認められ、知事表彰を受けた。

生活改善とともに、男女教員の格差是正にも取り組んだ。全国小学校女教員大会や全関西婦人連合会に県代表として参加し、「男性と同じ仕事をしているのに、なぜ女性は給料が安いのか」と、女性教員の地位向上を強く訴えた。昭和4年（1929）に東京で開かれた大会において、婦選（婦人選挙権）獲得同盟の市川房枝らに見込まれて同盟への参加を誘われるほど「富山に平岡あり」と注目される存在になっていた。

昭和5年（1930）年3月16日、富山市総曲輪小学校で開かれた富山県連合婦女会の総会にて、600名近い会員の前で「婦人の政治的教育と婦選運動に志す私の声明」と題して婦選運動に尽くす決意を発表した。同時に「日本婦選連盟」の設立を訴え、100名を超える賛同を得た。

教員を辞した初枝は、大阪朝日新聞社富山通信部の記者に採用され、間もなく全関西婦人連合会の専従活動家となるよう命を受け、大阪に拠点を移した。その後、婦選運動はもとより、産児制限運動、廃娼運動、労働争議の応援など、女性や貧しい労働者のために活躍した。昭和7年（1932）には、大阪で「玉造無産者病院」を開き、経営に携わった。貧しい人々のために、当時としては破格の「診察料無料、一日一割十銭、入院一日一円」で医療を提供したため、地元医師会の激しい反対運動にあい、何度も警察に呼び出された。そこで「無産婦人同盟健康保険会」を新たに組織し、加入者から半年五銭の入会金を受け取る形で医師会の批判を乗り切った。昭和14年（1939）脊椎カリエスを病んだが、昭和18年（1943）に空襲を避けて富山に戻るまでの11年間、病院の経営者として貧しい人々のために尽くした。

昭和21年（1946）、「平和建設婦人同盟」を富山市に設立し、いち早く戦地からの兵士の引き揚げ促進運動に取り組んだ。この年、初めて婦人参政権が行使された衆議院議員選挙が行われ、女性の議会進出に大きな希望を抱いた。昭和23年（1948）、公選第1回の富山県教育委員に当選し、唯一の女性教育委員として、公民教育の充実と女性の権利拡大に努力した。その後、2度の参議院議員選挙に立候補したが敗れた。昭和26年（1951）には「婦人有権者同盟」富山支部を結成し、地方議会への女性進出に大きく貢献した。同年、県内に6人の女性議員が誕生したが、いずれも初枝の影響を受けた人々であった。

昭和53年（1978）、老衰により逝去。

<専門員 松田 啓宏>



富山県連合婦女会総会の熱気を伝える新聞
「富山日報」昭和5年3月17日



玉造無産者病院の医師・職員たち
(黒いスーツを着た中央右の女性が初枝)



国産接着剤のパイオニア

いまむら ぜんじろう
今村 善次郎 (1890~1971)

今村善次郎は、明治23年（1890）に射水郡掛開発村（現高岡市大坪町）の農家の次男に生まれた。

明治40年（1907）、17歳の時に単身上京。さまざまな職を転々とし、夜間学校に通って勉学に励んだ。その後、借家ではあったが「今村商店」の看板を掲げ、自身が開発した家具用ワックス、靴磨きクリームや外国製の接着剤の販売を始めた。当時、日本ではイギリスの「メンダイン」など外国製の接着剤が市場を広く支配していた。そうした状況に憤りを覚え販売を続ける中、接着剤そのものの将来性に着目した善次郎はその国産化を決意。大正8年（1919）、販売を妻 さきに任せ、その開発研究に乗り出した。

大正12年（1923）、関東大震災で壊滅的な被害を受けながらも研究を再開し、ついに待望の国産品第1号「セメダイン(A)」の製造に成功した。この「セメダイン」は結合材の「セメント」と力の単位を表す「ダイン」とによる造語で、これにはメンダイン等の外国製品を日本の市場から「攻め」(セメ)出すという強い願望が込められていた。

しかし、国民の舶来品信仰は根強く、問屋や小売店からも「国産品は売れない」と相手にされなかった。そこで、全国各地の博覧会への出品、デパートでの実演販売、新聞・雑誌に大々的な広告を出す等、宣伝活動に努めた。また、赤・黒・黄という大胆な配色のデザインでブランドを育てることで売上げは順調に伸び続け、「セメダイン」の知名度は高まっていった。そして、劣悪な類似品や模造品の出現とそれに伴うトラブルを未然に防ぐため、昭和6年（1931）に「セメダイン」と「CEMEDINE」の商標を特許局に登録した。

順調に業績を伸ばす一方で「現状維持は退歩への第一歩だ！」と自らに檄を飛ばし、何度も試行錯誤をくり返し改良を重ねた。そして昭和13年（1938）、それまでの天然物の素材に変えて、合成材料のニトロセルロースを素材とする画期的な接着剤「セメダインC」を完成させた。「なんでもよくつくセメダイン、無色透明・耐水・耐熱・速乾性良し」という誰もがすぐに理解できるキャッチフレーズで大ヒットを記録し、「接着剤」という言葉を一般化させた。

そして、さらなる普及につなげたのが、戦前・戦後の模型飛行機ブーム、また、高度経済成長期のプラモデルブームでの「セット販売」であった。子どもから大人までが遊びのなかで自然と製品を手取る状況をつくり出したことで、人々の暮らしに欠かせない必需品となっていった。

昭和31年（1956）、生産体制の整備拡大や販売網強化のため、製造会社と販売会社を合併し「セメダイン株式会社」を設立。その後も工場の拡充や業務を拡大し、昭和41年（1966）、国産自動車メーカーのアジア進出に伴う大量受注を契機に、海外市場への参入・進出を果たした。そして、同年文化の日に、多年にわたり国産接着剤の育成に寄与した功績が認められ、勲五等双光旭日章を受章した。

受章の翌年頃から体調を崩し、昭和46年（1971）80歳で他界。「終生、接着剤一筋」という信条を胸に生きた人生であった。

<専門員 番匠 健太郎>



1961年ごろのセメダインC



昭和30年代全国学童模型飛行機大会
模型飛行機ブームでの「セット販売」で
セメダインCの認知度が高まる



自宅でくつろぐ善次郎と妻のさき

写真提供：セメダイン株式会社

80年前の太平洋戦争末期、富山県は学童集団疎開先として、東京都内の4つの区から約15,000名の学童を受け入れました。企画展では、疎開生活の様子や疎開を受け入れ支えた方々の証言、児童が疎開中に毎日書き綴った絵日記、今も交流を続ける学校の活動を展示し、改めて平和の大切さを考える機会としました。



「どうして富山に?」「後から1・2年生も疎開した!」



どこに疎開していたのかな?



疎開生活の様子 (1日の流れと出発から帰京までの流れ)



「どんなものを食べていたのかな?」



疎開を受け入れ支えたとやまの人々の証言



書き綴った絵日記(東京女子高等師範学校附属国民学校)



疎開中使用していた机、関連書籍



今も続く交流の様子



時代は変わりましたが、戦争も差別もなくなっていません。これから私たちがどう生きていくのか、人を育てていくのか考えさせられます。



夏休み期間を中心として算数の面白さを味わってもらおうとクイズやパズルを展示しました。パチンコ台などの大型教材（秋山仁先生が中心となり開発・製作）が好評でした。多くの家族連れが訪れ、考える楽しさを味わっていました。



- ・少ないヒントで答える問題「犯人を探す問題」が面白かった（中学生）
- ・気軽に楽しく算数にふれられて、すごく好きな空間です。（大人）

令和6年度 きらめき未来塾（夏休み期間中）

子供たちの創造力や表現力、柔軟な思考力を養うことをねらいに、今年度も3つの道場を開催しました。参加した子供たちは、講師の先生方にいろいろなことを教えてもらい、チャレンジしながら大いに活動を楽しむことができました。

☆思考道場 特別講師 秋山 仁（東京理科大学栄誉教授）
講師 小澤愛実 小里卓己
中田裕大 杉本拓武
養藤了佑（以上5名 県内小学校教員）

☆お笑い道場 講師 牧内 直哉
（フリーアナウンサー、社会人落語家）

☆右脳活用道場 講師 森 みちこ（漫画家）



思考道場 ～秋山仁先生の特別授業～



思考道場 ～一刀切り～



お笑い道場 ～ことばあそび～



右脳活用道場 ～先生と話し合う～

令和6年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業

〈助成対象校1校に10万円助成〉

子供が地域の人や自然、歴史、文化にかかわる「ふるさと学習」等に地域と連携し取り組む学校に助成する事業です。

今年度は次の5校が助成校となりました。

・助成校・

滑川市立田中小学校
射水市立歌の森小学校
射水市立新湊小学校
射水市立大門小学校
南砺市立南砺つばき学舎



令和5年度 助成校の1校
富山市立奥田小学校（奥田音頭を受け継ごう 女性の会の方と踊りづくり）

子どもの目、自然不思議発見写真展

8月28日(水)～9月30日(月)

小学1年から6年の子どもらが、学校での学習や日頃の生活の中から、その目を通して発見し、撮影した自然界の「不思議」「きれい」「おもしろい」を紹介した写真80点を展示しました。



・毎年、作品を見に来るのを楽しみにしています。どれも“子どもの目”が光っていて楽しく見せてもらいました。また、来年も楽しみにしています。



アザラシの赤ちゃん？ (3年)



空に楽譜♪ (5年)



シンクロ (1年)



花の中にほし (2年)



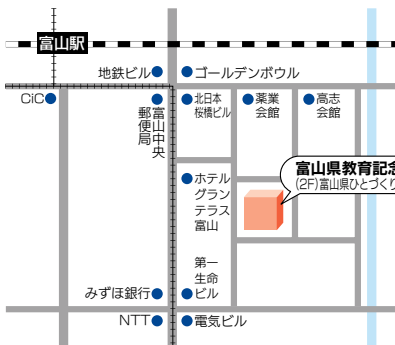
雲の龍が登って行く (4年)



ウォーターバリア! (6年)

これからの展示等の予定

- ・ 児童・生徒によるものづくり展 10月18日(金)～11月10日(日)
- ・ 富山県造形教育作品展 11月16日(土)～12月1日(日)
- ・ アイデアロボット展 12月7日(土)～1月5日(日)
- ・ プレ・サテライト展 高校生ものづくりフェスタ 12月1日(日)(県民会館にて)
 - ・ 関連企画 小学生ロボットづくり教室 1月5日(日)(教育記念館にて)
- ・ 富山県中学校美術展 1月17日(金)～2月2日(日)
- ・ 富山県版造形教育作品展・秀作回顧展 2月14日(金)～3月23日(日)



公式 X (旧Twitter)

https://x.com/t_hitozukuri

財団の取組みや富山県教育記念館の展示情報を掲載しています。ぜひ、フォローをお願いします。



教育記念館HP

<https://www.t-hito.or.jp/>

随時更新しています。



あ・と・が・き

企画展を親子でも見て欲しいと願い、期間を学校の夏休み期間中まで延長して開催しました。県内外から多くの方が足を運んでくださいました。展示のために様々な方にご協力を頂きました。深く感謝申し上げます。
この館報がお手元に届く頃には、郷土先賢室で新しい顕彰展が始まります。どうぞお出かけください。